

## 長岡郡大豊町の風土と民具調査

### －「フィールド実習Ⅱ」の報告－

橋尾直和・藤原佳恵・松本麻美・清家裕里奈・中村陶子・山崎美枝・米原加也

#### 1. はじめに

本稿は、2010年9月28日から30日まで、「フィールド実習Ⅱ」（橋尾直和教授担当）において、長岡郡大豊町豊永のフィールドワークを実施した際の調査報告である。調査には、文化学部2回生の藤原佳恵・松本麻美と4回生の清家裕里奈・中村陶子・山崎美枝・米原加也の学生6名が参加した。

大豊町の定福寺（栗生）で合宿し、地元の方々とふれあいながら、いろいろなお話を伺うことができた。大豊町豊永郷の西峰・岩原・栗生・永渕・大滝・筏木・八畝のインフォーマント（資料提供者）の方々に、天候に関することわざ、民具の方言呼称などの生活語や焼畑、神楽、禁忌の伝承などの山の暮らしと習俗の聞き取り調査を行った。大豊町の歴史・文化・環境に触れることができたフィールド実習であった。調査票は、1996年から実施している「四万十かいどう」風土調査で用いたものを活用し、調査方法は、インフォーマントに直接会って聞き書きする、面接調査方法を採用した。

「定福寺豊永郷民俗資料館」の見学も行った。定福寺や住民らが2009年、NPO法人「定福寺豊永郷民俗資料保存会」を設立し、民具資料館では約1万2000点の民具を管理、保管している。農業や林業に使う鎌やノコギリ、川漁に使う仕掛けなど多岐にわたり、特にノコギリの収集数は世界有数規模で、室町時代の形式を残すノコギリは国内で6本しかなく、うちの2本も資料館が所蔵している。副住職の釣井龍秀さんは、「柄の部分の手あかの跡を見ると、厳しい山あいの中で、家族のために豊作を願って作業した思いが伝わってくる。危機的状況にある民具を何とか残したい」と語ってくださった。

学生からは、「山の生活では様々な工夫がされていて、今はなくなってしまっているものが多いけれど、当時の知恵や工夫があるからこそ、今のような生活があるのだと思った。便利な社会になったが、それと同時に私たち現代人は、人づきあいや人と自然との関係など大切なものを失いつつある気がする。だからこそ、このような話を実際に聞けて良かったし、失わないように努力していかなければいけないと思った」との感想を聞いた。

今回のフィールド実習は、定福寺に食材を持ち込んでの自炊合宿となった。朝食と夕食を作って、お世話になったご家族にも召し上がっていただいた。最終日には、調査のあと、オブショナルで吉野川のラフティングに挑戦した。みんな初体験だったが、大豊町の自然を大いに満喫してきた。

本調査においては、定福寺住職の釣井龍宏さんと奥様、副住職の龍秀さんと奥様と息子さんをはじめ、大豊町豊永郷の皆さんのご協力のもと、調査を行うことができた。特に岩原の下村堯基さんには、ご自宅の民具を見せていただき、使用方法等についても懇切に解説していただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

## 2. 調査報告

聞き取り調査で得られた資料を、以下に掲げる。

◎インフォーマント：小松 俊雄さん 大正8年10月21生まれ（90歳）

調査地点：定福寺

調査日時：平成22年9月30日 9時～11時

生まれた所：大豊町大滝

住所：大豊町大滝

調査者：山崎美枝・米原加也

### 〈山の暮らし〉

- ・焼畑は、稗を作るために昭和の初めの頃までやっていた。
- ・一家に一頭、牛を飼っていた。
- ・年中食べることが出来るくらいサツマイモを蓄えていた。寒くなったらサツマイモが傷むため、もみ殻を入れて家の地下室で保存していた。
- ・ことわざ：朝蚊帳に入っていたら、雷が心配ない。
- ・昭和50年代、養蚕が盛んだった（農家の3分の2がやっていた）が、60年代に無くなっていった。
- ・小松さんが、大豊町に水道・道・電話を開通させた。

### 〈天候に関することわざ〉

#### 雨に関するもの

- ・サンダチ（夕立）
- ・サンダチアメ（夕立）
- ・ワルサアメ（働きに出ようとしたら降る雨）

#### 雲に関するもの

- ・アサッグモリ ハンゲンガナク（朝曇り禿が泣く）
- ・アサングリニ ハンゲンガナク（朝霧に禿が泣く）

#### 衣・食・住に関するもの（ことわざは知らないが、単語は使用）

- ・センチ（便所）
- ・ニワ（土間）

◎インフォーマント：北村 守重さん 大正12年5月15日生（86歳）

調査地点：定福寺

調査日時：平成22年9月30日 9時～11時半

生まれた所：大豊町永淵

住所：大豊町永淵784

調査者：山崎美枝・米原加也

## 〈山の暮らし〉

### 焼 畑

- ・北村さんが生まれる以前から昭和34、35年までは、やっていた。
- ・主にそば、粟を蒔いていたが、子供のころにひえも少し蒔いていた。
- ・まずは雑木を切り倒し、乾燥させ、竹でたいまつを作り、火を入れていた。その際、大きな木があれば、隅に置いて後で火をつけていた。
- ・最後に檜を植林する。
- ・消火活動は、今は消火器だが、昔は人が土をかけたりしていた。

### 焼畑に使われる民具

- ・トーングワ…中国から来たもので、草を刈ったりそばを蒔いてから土をかけたりするもの。  
4500年前からやっていた。
- ・トゥルングワ…深く耕すために掘り起こすもの。
- ・フタトゥング…またが2つに割れた鍬。
- ・ミトゥング…またが3つに割れた鍬。
- ・マシリカング…竹のかご。桑を摘むときに使用していた。
- ・イモユスギ…芋を洗うかご。
- ・ユキノカング…大きなかご。
- ・モーソ…竹で編んだひのきの板を編んでくっつけたもの。

### カマトッカ（露草）

- ・焼畑をしてから生えてくる花。肥沃な所に生える。それにまつわるタブーなどはなかった。

### 囲炉裏

- ・今も家にあって使用している。
- ・タワラクンゼを大晦日の日において、明くる年まで火を絶やさないようにしていた。どの家庭でもしていたらしい。
- ・昭和末期まで炬燵の上に置いて、下に炭火を置いていた。

### 仕事・家庭

- ・蚊帳は今はないが、昔は夏に家につっていた。
- ・農業をされていて、麦、芋を作っていたが、戦時中は全部提供していた。養蚕もしており、北村さんは出荷していた。
- ・農業は鎌と鍬ばかりで、牛を2頭飼っていた。昭和末期くらいから機械ができ、他の仕事もできたため、牛は少なくなっていった。馬はぼつぼつ飼っている人がいて、運搬用に使用していた。

### 神 楽

- ・昭和初期から始めた。



- ・大豊で踊っていたが、中・四国大会でも踊っていた。
- ・大勢の人が踊っていて、男性のほうが多かった。
- ・旧暦の9月18日に五穀豊穡・無病束帯の秋の大祭があり、小さい子から大人まで踊っていた（正月、3月もやっていたが、今はなくなった）。
- ・20数種類の踊りがあり、1、2種類ずつ覚える。踊りだけではなく、笛、太鼓もあった。
- ・両刃、面、獅子面の踊りがあった。（手杵の舞、弓の舞）

#### 禁忌（タブー）

土地が肥沃な山に入ってはいけないという言い伝えがいくつかあった。

#### 〈天候に関することわざ〉

##### 雨に関するもの

- ・サングチ（夕立）
- ・サングチアメ（夕立）
- ・フケリアメ（見せびらかすように降る雨）
- ・ワルサアメ（外出しようとした途端に降り出す雨）

##### 光・音に関するもの

- ・アキノユーヤケ カマオトンゲ（朝の夕焼け鎌を研げ）

##### 生物に関するもの

- ・ツバメング ヒククトプト アスワアメ（燕が低く飛ぶと明日は雨）
- ・プトンガ トンダラ アメンガフル（プトが飛んだら雨が降る）

##### 年中行事に関するもの

- ・シナネサマンガ スンダラ ナトゥンガオワル（様が済んだら夏が終わる）

##### 病気に関することわざ

- ・カンセトゥンガ イタムト アメンガフル（関節が痛むと雨が降る）

##### 衣食住に関するもの

- ・フンドシंगा シメルト ヒヨリंगाチンガウ（褌が湿ると日和が違う）

◎インフォーマント：釣井 龍宏さん 昭和12年4月25日生まれ（73歳）

調査地点：定福寺

調査日時：平成22年9月28日 13：00～16：30

生まれ所：大阪市住吉区我孫子町

住所：長岡郡大豊町栗生158

調査者：山崎美枝・米原加也

#### 〈山の暮らし〉

- ・福寿草祭りがあるが、地元の人が自発的にスタートさせ、30回ほどツアーを行った。

- ・福寿草とは春の最初の花で幸せを呼ぶと言われている。
- ・定福寺は724年に建てられた。
- ・寺などの文化は後世に残すということが大切である。
- ・寺は自分のものではなく、皆のものであると思われる。
- ・焼畑は見たことも聞いたこともない。

#### 禁忌（タブー）

- ・七夕の日に川に行けばエンコーが出てきて連れ込まれる。（今では言われなくなった）

※エンコー…カッパの類

#### 〈天候に関することわざ〉

##### 光・音に関するもの

- ・アサヤケニ カマトングナ（朝焼けに鎌研ぐな）
- ・ナंगाセ（梅雨）
- ・ヒトトゥカミナリ オービヨリノモト（ひとつ雷に大日和のもと）
- ・ヒトトゥカミナリ アメンガヤム（ひとつ雷に雨が止む）
- ・ヒトトゥカミナリニ カワオワタルナ（ひとつ雷に川を渡るな）
- ・ナंगाセノ ナリアンガリ（梅雨の鳴り上がり）
- ・トゥユニ カミナリング ナレバ トゥユンガアンガル（梅雨に雷が鳴れば梅雨が上がる）

##### 雲に関するもの

- ・クモンガンデルト ヒヨリニナル（雲が出ると日和になる）
- ・ニシंगा クモレバ アメ（西が曇れば雨）
- ・アサンギリング オーイノワ アスノハレ（朝霧が多いのは明日の晴れ）

##### 生物に関するもの

- ・ブトंगा トンダラ アメンガフル（ブトが飛んだら雨が降る）
- ・ムシंगा クルト ヒヨリングチンガウ（虫が来ると日和が違う）
- ・カエルugg ナイタラ アメ（蛙が鳴いたら雨）
- ・ハチノスnga タカイトシワ シケ（蜂の巣が高いと時化（暴風雨））

##### 季節に関するもの

- ・ハルニ ミッカトゥンドゥク ヒヨリナシ（春に三日続く日和なし）

##### 年中行事に関わるもの

- ・シナネサマंगा スンダラ スズシー（様が済んだら涼しい）
- ・シナネサマंगा スンダラ スズシューナル（様が済んだら涼しくなる）

◎インフォーマント：筧 義孝さん 1930（昭和5）年11月3日（79歳）

調査地点：定福寺

調査日時：2010年9月28日 13時10分～16時30分

生まれた所：大豊町筏木（いかだぎ、いかなぎ）

配偶者の生まれた所：大豊町川井（かわい）

住所：大豊町筏木253

調査者：清家裕里奈・藤原佳恵

## 〈山の暮らし〉

### 茅葺き屋根

- ・ 寛さんの幼少の頃、家の屋根は茅葺き屋根であった。昭和30年頃まで、茅葺き屋根の家が多かったが、昭和30年代後半から姿を消していった。茅葺き屋根には、「モヤエリ」という三角の屋根が付いていて、この大きさは家の大きさによって変わってくる。
- ・ 部落内で協力して、仲間山（なかまやま）から屋根の茅をとってきた。結という集団で協力をして生活をしていた、互いにお金を出すことはなかった。
- ・ それから、雨が降ったときに、水の流れを良くするために屋根の勾配をきつくする。

### 囲炉裏（ユルリ）

- ・ 囲炉裏で田楽、「アメッゴ（アマゴ）、鮎（アイ）」を焼いて食べていた。また、焚き木をして、暖を取っていた。この時、煙が立ち上ること、茅葺き屋根の茅が強くなるということであった。このことを「フスブル」という。

### 畑仕事

- ・ 家の横にある畑で、麦、桑、里芋、甘藷（カライモ）を作っていた。寛さん宅では、養蚕をしていて、桑は、蚕が食べるために栽培していた。田畑を耕すのも、茅葺き屋根と同様、結で協力して行われた。
- ・ 畑が急な斜面にあることを「サッガシー」という。

### 山仕事

- ・ 山では、様々な山菜が採れた。セリ（ホンゼリ、ミツバゼリ）、ミツバ、フキ、イタドリ、ワラビ、ゼンマイが採れた。ゼンマイは経済的な価値があり、1キロ1万円するという。そのため、家の横の畑に移植して育てていた。日当たりの弱いところで、よく育つ。
- ・ 山から草や茅などを運ぶ時には、「セオイ」を使った。
- ・ 寛さんの親は、夏に山仕事をする時、重労働のため食事を1日4回行っていた。朝飯、昼飯、二番茶（午後3時ごろ）、晩飯という。寛さん宅では、牛を飼っていて、牛のフンを堆肥として、畑に使用していた。

### 防 災

- ・ 台風の時に風から家を守るために、大きな木を植えて風をしのいだ。

### その他

- ・ 年に3回あった祭りが、年々祭りの数が減っていつている。昔は、部落の中に「トーヤ（頭屋）」というお世話をする家があり、近所同志の交流が多かった。近年は、結がなくなり、人と人のつながりが少なくなった。車に乗る人がほとんどのため、すれ違っても止まって挨拶をする



ということがなくなった。昔は、人とすれ違う時、「茶、食ベタカエ？」という挨拶がなされ、茶というのはご飯のことである。

#### 禁忌（タブー）

- ・ 9月に竹を切ると、虫がこないので長持ちする。
- ・ 水分の関係から旧暦の6月に木を切ると良い。

〈天候に関することわざ〉（使っているものを○、聞いたことがあるものを△で記述）

△ニシノソラッガ アケタラ（ユウヤケ） ヒヨリ（西の空が明けたら（夕焼け）日和）

○コチンガ フイタラ イケノミンドゥオ ホス（東風が吹いたら、池の水が干す）

○ニシンガ クモレバ アメ（西が曇れば雨）

#### その他

- ・ 霧のあしがそろっていたら、日和がいい。
- ・ 生ぬるい、湿気がある（ミノウエという）
- ・ 雲が南から北へ、また西から東へ移動すると、雨が降る。

山に入ると方角が分らなくなるので、方角に関連することわざは、聞いたことがない。また、低い山の横に高い山があると、太陽が山に隠れて日が入らなくなり、天気が分らなくなる。

#### 【感想】

山のくらしの話を聴いて、私の地元のくらしと似ていて、地元が懐かしく思えた。過疎化が進んでいることを聴き、寛さんが残念がっていらっしゃるのが伺えた。昔よく使っていたという「茶、食ベタカエ？」という挨拶が、とても温かく感じ、今では使わなくなってしまったのが、寂しく感じた。今回のお話を通して、後世の人にできるだけ多く昔のくらしや生活の知恵など、受け継いでいってもらいたいと思った（清家）。

◎インフォーマント：寛 利亀さん 1929（昭和6）年11月8日（78歳）

調査地点：定福寺

調査日時：2010年9月29日 9時00分～11時30分

生まれた所：大豊町筏木（いかなぎ）

配偶者の生まれた所：大豊町立野（たつの）

住所：大豊町筏木174

調査者：清家裕里奈、中村陶子、松元麻美

#### 〈山の暮らし〉

##### 焼 畑

- ・ ソバ、三極を作った。三極は、蒸して皮を剥いて乾かす。こうして、紙の原料としていた。主に紙幣の原料に使われた。
- ・ 露草は、天敵である。特に、三極やソバの上に生えていく。また、露草の他にもスギナ・アザ

ガオが天敵とされていた。スギナは繁殖力が強く、アサガオは一般的に知られるアサガオではない厄介なものである。

#### 雑 木

- ・山で取れた木の不要なところは、炭として使用された。

#### 民 具

- ・カマ…草を刈る。
- ・エッグマ…木を伐る。
- ・ノコギリ…重量のある木を伐るときに使う。
- ・カッゴ
- ・オイコ、セオイ…薪を運ぶ、箕さん宅では肩ヒモを作っていた。
- ・ゾーリ…藁で作る、2日でぼろぼろになる人もいた。
- ・サス…先の尖ったもの、稲を刈って束にしたものを運んだ。

#### 禁忌（タブー）

- ・お盆の17日までに川に入ってはいけない。17日までに川に入るとエンコーに連れ去られると言われていた。このことを代々親から言われていた子供が多く、怖がって入る子供はいなかったらしい。
  - ・一粒万倍の日以外に種まきをしてはいけない。この日に蒔いたら何万倍にもなるといわれている一粒万倍日に種を蒔けという教えから。信心深い人はこの日でないといけないとしているが、目安にしているだけの人が多い。
- 一粒万倍日とは、暦作りの本家である高島が昔から暦に掲載しており、今年（2010年）は、

1 月 （1 日・2 日・5 日・14 日・17 日・26 日・29 日）

2 月 （8 日・13 日・20 日・25 日）

3 月 （4 日・12 日・17 日・24 日・29 日）

4 月 （11 日・20 日・23 日）

5 月 （2 日・5 日・6 日・17 日・18 日・29 日・30 日）

6 月 （12 日・13 日・24 日・25 日）

7 月 （6 日・7 日・10 日・19 日・22 日・31 日）

8 月 （3 日・18 日・30 日）

9 月 （14 日・19 日・26 日）

10 月 （1 日・11 日・14 日・23 日・26 日）

11 月 （4 日・7 日・8 日・19 日・20 日）

12 月 （1 日・2 日・15 日・16 日・27 日・28 日）。

- ・人が死んでも盆踊りに行く。仏様を祀るために踊るので盆踊りには参加する。

〈天候に関することわざ〉（使っているものを○、聞いたことがあるものを△で記述）

雨に関するもの



△サンダチ（夕立）

△サンダチアメ（夕立）

#### 光・音に関するもの

△ナंगाセ（梅雨）の鳴り上がり

※「雨の時に鎌を研げ」は、聞いたことがある。

※ニシキタングモニ アメフラズ（西北雲に雨降らず：西北に雲が流れたら雨を連れてこない）は、よく聞く。

#### 【感想】

寛さんは、土に愛着を持って百姓をされていた。自分が育てる野菜は、子供を育てるように手をかけると、その分よく育つので、やりがいがあるということであった。このお話をされている寛さんの顔がとても輝いて見え、温かい気持ちとなった。

今回の調査を終え、地域の方と話をすることの大切さを改めて感じた。生の声を聴くことで、昔のくらし風景や知恵を学ぶことができる。このことが、今の大豊に住む子供たちから、さらにはその子供へと“受け継がれること”を願っている（清家）。

◎インフォーマント：西村 時宗さん 1944（昭和19）年6月22日（65歳）

調査地点：定福寺

調査日時：2010年9月30日 9時00分～11時30分

生まれた所：大豊町八畝（よおね）

配偶者の生まれた所：大豊町八畝

住所：大豊町八畝121

調査者：清家裕里奈、藤原佳恵、松元麻美

#### 〈山の暮らし〉

##### 焼 畑

- ・7月・8月に畑を焼き、種もまく 大根・小豆・白菜を作っていた。
- ・夏の始めに雑木を畑に組んで畑の上から逆焼きにする。勾配があるため上から焼く。下から焼くと全部雑木が焼けないため。どこ（太い枝・木の芯）が残るため。
- ・大根と白菜は夏の終わりごろ、小豆はちょうど土用の日（三回）に種まきをした。それらを収穫した後にみつまたの苗を植える。三極は3年で収穫し、2回収穫するとカブが弱くなるため終わる。みつまたと同じ時期に杉の木も一緒に植える。このようにして焼畑を利用していた。
- ・稗は作ったこともなく見たこともない。

##### カマトッカ（露草）

- ・広範囲に生えないため、生えていたらひいて土で埋めて処分する。そうすると腐って肥料になる。ウメクワという溝をほって埋める。

- ・焼畑では作物が取れることを期待しない。取ればもうけものという程度の感覚。
- ・カマトッカ（露草）が語るような言い伝えや文句は聞いたことがない。

#### 焼畑で使っていた道具

- ・ノコギリ
- ・エッガマ
- ・チョーナ…斧。薪割り用の薄いもの。
- ・トーングワ…ヒラグワ（平鍬）のより頑丈なもの。
- ・トーミ…唐箕。回転させて使う。
- ・ミ…箕。選別用のもの。
- ・テミ…箕の小さいもの。
- ・オイコ…オイコで荷物を背負い、馬を連れて山から帰る。山から帰る時は手ぶらでは決して帰らない。まきや荷物がなければ下肥（便）を運んだ。途中、休憩する場所をやすばという。
- ・テンビンボー…天秤棒。

#### 神 楽

- ・経験はない。

#### モモチ（弓）

怒田や八畝ではやっていたが事故があってなくなった。屋号が「的場・射場」の家で行われていた。

- ・神祭は年に3回：正月・6月・9月に行われていた。7日～23日の間で4・9日はない。
- ・秋ごろには皿鉢料理を順番にそれぞれの家がつくりオキヤクとしてもてなした。皿鉢の豪華さでその家が裕福かどうかわかった。

#### カミソ（櫓）

- ・普通は家の外で蒸すが、家の中で蒸す地域もあった。だいたい4時間で、蒸すときに一緒に芋を入れて食べた。

#### 囲炉裏

- ・暖房。いも・もちを焼いて食べていた。

#### クンゼ

- ・よく燃やすときとそうでないときを調整する。火はなるべく消さない。消すことを嫌う。

#### モッソ

- ・弁当箱。お椀と蓋にご飯を入れ、山で食事をとっていた。2回分けて食べた。本昼：午前11時ごろ、二番茶：午後3時ごろ。

#### カヤブキ（茅葺き）

- ・普請組（近所の人々）でなん棒絞めをした。ふきは専門職の人がする。10年～20年に1回茅葺きの屋根を替える。いろりやかまどの煙でふきが重くなり屋根が強くなる。

#### 山の掟

- ・杉・ひのき・けやき・まき 国のものだから切ってはいけなかった。明治になると、山が民間

の者に分配されたため自由にできるようになった。山の上（頂上に近いところ）は身分の高い人が住んだ。

#### 禁忌（タブー）

山の神（マケヤレ）

- ・けがをするから気をつける

#### 黒 滝

- ・カンザン（殿様の山）だから入ってはいけない

#### 死日産日

- ・身内が死んだものや、お産をしたものは山に何日間か入ってはいけない。山仕事もできない。理由としては、山の神が怒り、山が鳴る（ゴーゴー鳴って恐ろしい）からだということ。どうしても山に入るときは、神を祀る。

#### 七夕・盆裏

- ・きゅうりを食べてはいけない。

〈天候に関することわざ〉（使っているものを○、聞いたことがあるものを△で記述）

#### 雨に関するもの

- ワルサアメ（外出しようとした途端に降り出す雨）

#### 雲に関するもの

- アサッグモリニ ハンゲンガナク（朝曇りに禿が泣く）
- アサッグリニ ハゲンガナク（朝霧に禿が泣く）

#### 光・音に関するもの

- アサヤケワ キョーノアメ、ユーヤケワ アスノヒヨリ（朝焼けは今日の雨、夕焼けは明日に日和）
- △ナングシノ ナリアンガリ（鳴り上がり）
- △ヨゾランガ カンガヤクト アスワ テンキノカワリメ（夜空が輝くと明日は天気の変わり目）

#### 生物に関するもの

- カエルンガ ナイタラ アメ（蛙が鳴いたら雨）
- △ツバメンガ ヒククトプト アスワアメ（燕が低く飛ぶと明日は雨）

#### その他

- ・アサ フリンダシタ アメワ アンガル（朝降り出した雨は上がる）
- ・ノキノ シズクンガ カワカンウチニ ヒンガアタッタラ テンキワ アテニナラン（軒の雫が乾かんうちに日があたったら天気はあてにならん）
- ・アサヤケワ ヒヨリクルウ（朝焼けは日和狂う）
- ・ナガシノ ヨーバレ（梅雨の夜晴れ）
- ・キリアシंगा ソロエバ アメアンガル（霧足がそろえば雨あがる）
- ・カワセンガ キコエタラ アメアンガル（カワセが聞こえたら雨あがる）
- ・ミナミングモンガ イキンダシタラ テンキンガワルイ（南雲がいき出したら天気が悪い）



- ・キタングモッタ イキダシタラ ヒヨリ（北雲がいき出したら日和）
- ・ニシノクモニ アメフラズ（西の雲に雨降らず）
- ・オトシカゼンガ コワイ（落とし風が怖い）
- ・アシंगाイタムカラ ヒヨリंगा クルウ（足が痛むから日和が狂う）
- ・ほとんど使ったことも聞いたこともない。山では生死に関わるほどの危険が少ない。雨が多量降ることもまれではないため慣れている。

### 【感想】

山の生活では様々な工夫がされていて、今はなくなってしまっているものが多いが、当時の知恵や工夫があるからこそ今のような生活があるのだと思った。便利な社会になったがそれと同時に私たち現代人は、人づきあいや人と自然との関係など大切なものを失いつつある気がする。だからこそこのような話を実際に聞けて良かったし、失わないように努力していかなければいけないと思った（藤原）。

◎インフォーマント：三谷 勇太郎さん 昭和13年4月12日生（72歳）

調査日時：9月28日

生まれた所：大豊町西峰

配偶者の生まれた所：高知市旭天神町

調査者：中村 陶子・松元 麻美

## 山の暮らし

### 焼 畑

- ・回りを切り取り、山の上から火を燃やす。そうすることで燃やしたい土地だけを燃やすことができ、山火事になるのを防ぐ。
- ・トウモロコシ、こきび、稗、ソバ、粟を作っていて、現在でもこれらは作られていて、飢饉に備え蔵に保存してある。
- ・昭和20年まではどこの家庭でも焼畑を行っていたが、朝鮮戦争で焼け野原になり、その土地に建築用の木を植え始めた。その木を多く植えすぎたことで人が住めなくなり、いのししが増加した。
- ・焼畑は初夏または晩夏に行われ、葉っぱが出てきたころを目安にしている。
- ・焼畑のリーダーを決めており、そのリーダーが指揮を執り時期や火をつけるタイミングなどを指示する。
- ・焼畑を行うことで虫が死に、いい草が生えて牛がよく育つので農業だけでなく酪農にも利点がある。
- ・露草は少し枝があればどんどん成長し、栄養分を吸収するので、ほかの作物が育ちにくくなるため刈り取る必要がある。焼いても生えてくるので深く掘って埋め、肥料にする。刈った草は置いておくとまた生えてきてしまうのでかごに入れて溜めてから埋める。

## 道 具

- ・使っていた民具は柄鎌、鉋、鎌、トビグラ（とび）、腰つけ、ホイコ（しょうこ）などがあった。
- ・エッグマ…柄鎌。木を切るときに使う。
- ・ナタ…鎌。草を切るときに用いる。
- ・トビングラ…トビと呼ばれており、見た目は熊手の1本だけの形で草を寄せるのに使う。
- ・コシトッケ…腰つけ。何でも入れるあ。
- ・ホイコ…山で取ったものを入れる。

## 生 活

- ・ご飯の時間は小茶（午前10時ごろ）、二番茶（午後2時ごろ）、晩飯（午後9時ごろ）となっていた。
- ・午後10時ごろからは夜なべをして、山で履くための草履を作っていた。ぞうりは1日履けばつぶれてしまうので毎日つくっていた。
- ・山に行くときのお弁当は、コリ（葦製）やモッソー（木製）に入れて持って行く。これらは上下に分かれており、中身は米、とうもろこし、こきび、粟、稗、おかずは畑で育てているもの（春～秋）や芋や大根などの根菜（冬）となっていた。他には味噌を持って行き、たらの芽やのびるなどの山菜につけて食べていた。
- ・裸足でどこにでも行くので、学校では、はじめに「インデ（溝）」をつくって足を洗ってから学校に入っていた。全校生徒は300人もいた。

## 禁忌（タブー）

- ・サンクチュアリには立ち入ってはいけない。何ヵ所か「山の神」や「蛇口」をつくり人が立ち入らないようにする。
- ・30haぐらいの土地をサンクチュアリとする。
- ・禁猟区には入ってはいけない。
- ・入らず山をつくり絶対に入らない。生態系を守る
- ・氏神様（豊受大神）に氏子入りをする。1年に3回祀る。米を炊きつぶさずに団子を作り、山の神には小さい団子を15個、氏神様には大きい団子を3個お供えする。

〈天候に関することわざ〉（使っているものを○、聞いたことがあるものを△で記述）

### 光・音に関するもの

○アサヤケワ シケノモト（朝焼けはシケ（時化・暴風雨）のもと）

△朝焼けに鎌研ぐな

○アサニジワ オーシケノモト（朝虹はオーシケ（大時化・暴風雨）のもと）

### 生物に関するもの

△つばめが低く飛ぶと明日は雨

○カラスノ ミンドゥアビ（カラスの水浴び）

△蜂の巣が高い年はシケ（台風）が来ん



### 季節に関するもの

○ハルニ ミッカトウドック ヒヨリナシ（春に3日続く日和なし）

### 3. おわりに

本調査では、長岡郡大豊町の山の暮らしについて、学生と共同でフィールドワークを実施し、多くの知見を得ることができた。山に暮らす人びとにとっては死活問題につながり、山の教えとなる「天候に関することわざ」は、数多く収集することが、使用語彙から次第に理解語彙へと移行していることが確認できた。学生たちも、先人の知恵を大いに学ぶことができたであろう。今後の課題としては、豊永郷における生活語の全集落方言調査が考えられる。

#### 【参考文献】

- 香月洋一郎（2009）「あの頃の豊永1－昭和47年（1972）の聞き書き帖から」『豊永郷文化通信1』定福寺豊永郷民俗資料保存会
- 土居重俊・浜田数義編（1995）『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
- 橋尾直和編（2008）『高知県大月町柏島のフィールドワークー「四万十かいどう」風土調査ー』四万十かいどう推進協議会



聞き取り調査風景



大豊の自然をバックに



下村さん宅にて民具調査



定福寺豊永郷民具資料館の見学



みんなで作った夕食いただきます！



いざラフティングに出陣じゃ!!

（はしお なおかず・本学教授、ふじわら かえ、まつもと まみ・本学部2回生、  
せいけ ゆりな、なかむら ようこ、やまざき みえ、よねはら かや・本学部4回生）